三山雅集

上

三山雅集序

夫佛種從緣起といふ吾宗に沙汰する事にして[illegible]
神乃[illegible]
[illegible]是善因乃[illegible]
于茲三山事實權現[illegible]灵威[illegible]萬歲已往の舊跡或ハ
宮祠寺院[illegible]規模書[illegible]秘[illegible]傳[illegible]記[illegible]若干[illegible]
[illegible]土地方畿[illegible]邊境[illegible]息[illegible]稀
[illegible]世[illegible]韞匱而藏也[illegible]山下
[illegible]驗者巢雲巖呂笳[illegible]國原[illegible]武陵乃雅士
[illegible]慕[illegible]廣前奉納の句[illegible]滿[illegible]古き[illegible]
集[illegible]梵河の貴[illegible]山谿の[illegible]

三山雅集 二巻三冊 地誌・和歌・俳諧 東水 宝永七刊 東大(大泉叢誌一四一六)・東大史料(同上)・酒田光丘(同上)・鶴岡(同上) 国会・東博・大谷・教大・慶大・国学院・早大・東大・東大酒竹・東北大(「三山案内」)・東北大狩野・北大・大阪府・日比谷加賀・岩瀬・酒田光丘・鶴岡・米沢林泉・大橋・甘露堂・柿衛・松宇・神宮・高木・天理綿屋・藤園・無窮神習・旧彰考 三山雅集(大正三)(昭和一七) ＊羽黒文殊院呂笳発起

少ころ〳〵より画書なしめいまし人今乃詩歌耳目ぬるに
我出つゝね予この艸房にとそまて是より序なりしんやと
いふいと称らこの事〳〵語られたるよ巻を閲するに
寔より往昔より秘し給へ家中に千〻百が一ツ微か中乃微
されとも大抵等閑なるぬ事ともにして志かも艾繁撮要ハ
たゆ理ぬりの袖ましてアルやほうしむを思ひてゆへ知いとも
あとたる志家へたるたより童蒙の目にも解しまこそにも
いふ給れハ船この日或ハ年代の性なりしぞるなり家を由来未考
なしいうしいと云給れハいでや神威又貢我志りこの山より志
我伏を家考豈敢て年数ありかたり信ずんき我信せば将信
ぜさるを信ずべりんや一事ひとも我運家もゆゑ嶽の瑞氣

権現に霊光視聴に ぬるに不誰に何に ぬをさらに此やほうべく
歴代乃彩古よあづかり人情の辟固我りてその事をいそふ
蓋君子に恥家なり故曰愛而知其悪悪而知其善なり
ふ我ら此初学やけれを初めて礫に一句夜光にならば
入事ぬるに堪能乃アル家目より行腹ひとり給れとも又道
しるべに一奥にあり想ひ笑ひよきにいよく褒誹ともにむさく
て善に入の場になしと此外乃とれたるハ後の識者に譲り
子の見聞ける三ツ四ツ記とつ我往詣者に小補に梓り鏤
よりて云ふ三山雅集と題をこの名ぬるにあらしいまし
おそれ給まて仮にもこ此名我再にしも知れ漸ひあゆこと
運ぶ乃念をも得ふしに永く讃佛乗乃善因とも頼せよ

りしかいへば僮僕立出て殘星乃暴り荒澤の本流
を汲ミ後夜ハ炉ヲ酒田乃簾茶找沸して一碗二碗
ヲ及べバ惟(メバ)二人両腋ヲ清風の生ふる事のミ覚ゆ

荒澤　野衲東水書

三山雅集巻上

最上河　附白糸滝

此國より実えてする大河ましく源を會津根よりも漲望
ゆしごてんと云ふ所ぞ云いと云ひし難所にて經て
山形（ガタ）の城外を見ぐり板敷乃山関を抱（イダ）きかけ衆流
をとけ入てたゞ事にあらしいとんかゝ如し果て酒田の海津
より落たり編にとられ船などの乃がるもあんゆくやうに
なんといひはゆしのがるりたまこの月ぞかもとにいふ
如れとぞ古きこ文小と書侍へけ見

古今集大歌所御哥

最上川のがれいやぞる編に見れいる小は何にぞ月ぞかれ

後撰戀四

こぬ人を淀のわたりの稲舟の
いなとばかりも聞えてしがな

千載雜下 長秋

霞こめ川瀬くもらで澄む月の
さやけさ見ゆる夜半にもあるかな

續後撰釈教 十戒中 自贊毀他 寂念法師

思ひやれ八十瀬の稲舟のつまで流れて
年を経つらん

前内大臣

續古今冬

いかにせん君ひきわたす舟人の
こぬ夜は河の波となるとも

雜經

夫木集

もろともに乗りおくれぬる舟人の
いなとばかりも聞えてしがな

新後撰雜中 藤原嗣房

いかにせん君ひきわたす舟人の
こぬ夜は河の波となるとも

續千載夏

寂念法師

霞こめ川瀬くもらで澄む月の
さやけさ見ゆる夜半にもあるかな

續後拾遺雜中

前関白太政大臣

思ひやれ八十瀬の稲舟のつまで
年を経つらん

新後撰雜中

後頼朝臣

こぬ人を淀のわたりの稲舟の
いなとばかりも聞えてしがな

千載雜下 長秋

霞こめ川瀬くもらで澄む月の
さやけさ見ゆる夜半にもあるかな

後撰釋教 十戒中 自贊毀他 寂念法師

思ひやれ八十瀬の稲舟のつまで流れて
年を経つらん

前内大臣

續古今冬

いかにせん君ひきわたす舟人の
こぬ夜は河の波となるとも

雜經

夫木集

もろともに乗りおくれぬる舟人の
いなとばかりも聞えてしがな

新後撰雜中 藤原嗣房

いかにせん君ひきわたす舟人の
こぬ夜は河の波となるとも

續千載夏

寂念法師

霞こめ川瀬くもらで澄む月の
さやけさ見ゆる夜半にもあるかな

續後拾遺雜中

前関白太政大臣

思ひやれ八十瀬の稲舟のつまで
年を経つらん

新後撰雜中

後頼朝臣

こぬ人を淀のわたりの稲舟の
いなとばかりも聞えてしがな

千載雜下 長秋

霞こめ川瀬くもらで澄む月の
さやけさ見ゆる夜半にもあるかな

後撰釋教 十戒中 自贊毀他 寂念法師

思ひやれ八十瀬の稲舟のつまで流れて
年を経つらん

前内大臣

續古今冬

いかにせん君ひきわたす舟人の
こぬ夜は河の波となるとも

雜經

夫木集

もろともに乗りおくれぬる舟人の
いなとばかりも聞えてしがな

新後撰雜中 藤原嗣房

新後拾遺 後鳥羽院下野

寂上川いなしまつ人の稲舟をしたり斗を心成とも見えむ

同上　道因法師

もかこの上りしやしぬ稲舟のあしかるべき程をしらしき

貞享の比あし羽黒山別当職を蒙りて入院の

折りしやこの道にまゐりて　僧正瀧海

いかれ船のあわりしてもこれ上川ぶ河は安き世の船にしるを

稲舟は渡る水に流されてのあるしてまるもかへ川かる

麦川にて稲ぶ手ひ見ん暫よりしし　川　貞徳

奥羽行脚のある

さみだれをあつめてまして宛かみ川　芭蕉

川はなれ鎌(サヲ)さしてあゆるかの　其角

稗もかに世の中より稲宛かし　川　京　惟然

かくこそ胡坐(アグラ)乃類の櫂(カイ)はかひ　浮生

星落てく底より岸より茂かるこの波　出雲　風水

はまのぬ川の明りかるの　聖　亡人　呂丸

釣るぎや鮎りはしふる道者船　酒田　莞兮

代垢離や幣に稲ふ川　令　桂斉

水の粉に簀(サイ)乃競ひや宛上河　令　茂伴

涼しさの毎りはなりしもかるこのは　鶴岡　貝松

稲舟も馬積めてく　河流　羽黒　此紅

蜷貝の名は結まつて水屑(ミ)の船　令　東水

鶴をひきて鳥なりけるを家と川 山風

初鮭や鶴成落る 艇(ミサゴ) 令 呂笳

宮上川をくるれば右の断岸千尺野に緑樹のひ白
紗よりも白く漲りて見ゆるは白糸乃瀧なり凡此河の
上下まさりひ瀧たぐ○滝なぐ四十八瀧とや傳ひ居りいまに
源義経越後経て此里にいたりみちのくへ越さ
れる時ある瀧を見て倍り具しきりける女房の
よそれる音なり

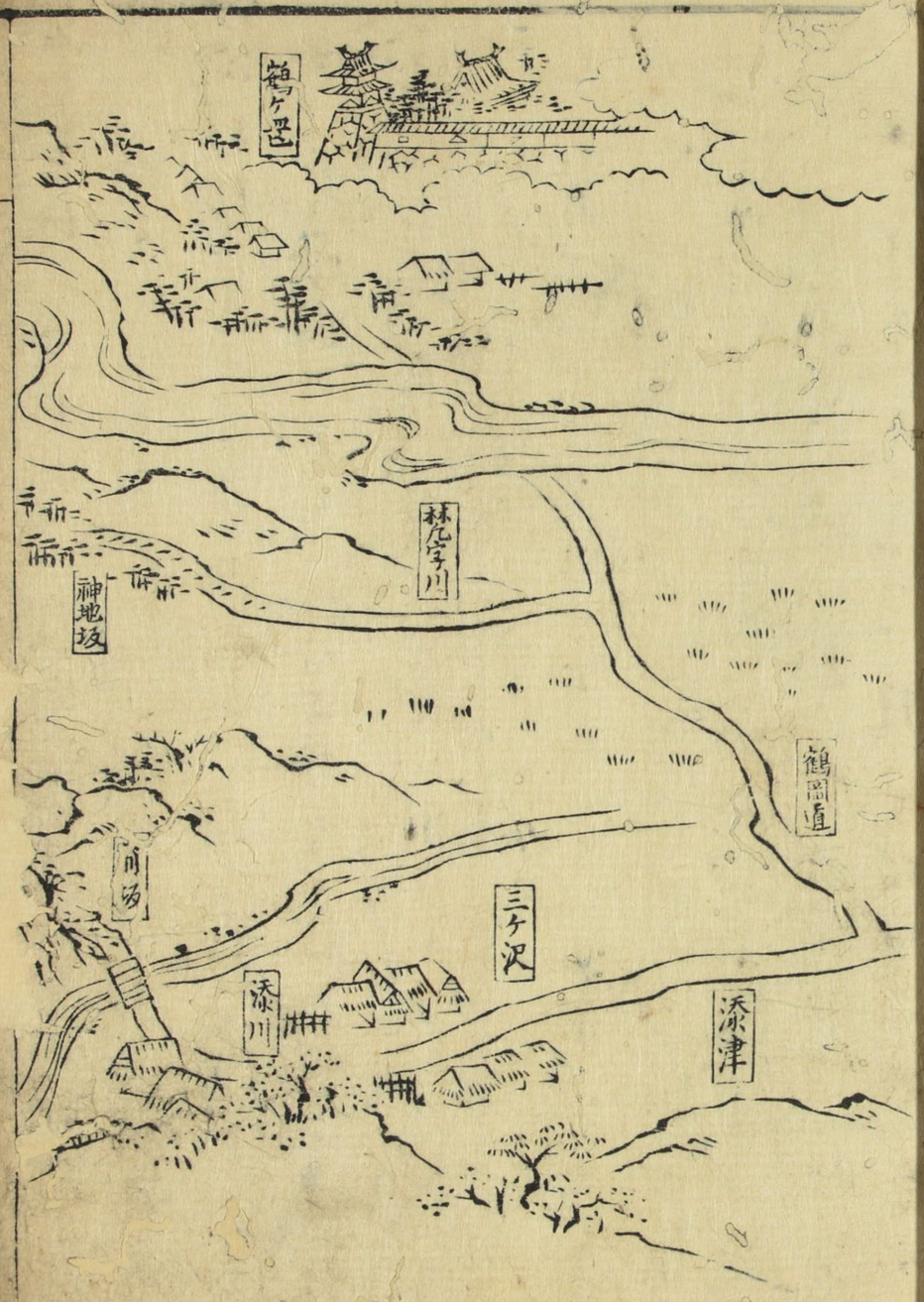
宮上川瀧に此宮河まれれどもでぞ無る白糸此滝
白糸此瀧やしてゐるとこゝろてん 桃隣
散川とて来る極此糸やたぐる 滝(七人) 柳風

清河 附五所王子

此門領地此函谷(カンコク)なりいにしへ乃按察(アセ)使(ヂ)もしけ取り関門を
まへらきけるにや今も城主より取留を重れて住す成
ゆる也 瀧中より吹きつる風も春秋成わるもそなげし
れれは讒(コトハガ)て清河ぐしとやなるはせり

さよ川や裸形ぐら乃 道明寺 山形 桃陽
郭公板浦越へと雁ぐらさじ 羽黒 東水

村の上にて小さる御宮地あり是するなり五所王子なり
それこそ義経下向の折にし弓箭太刀鎧等成けこゝ
奉納をり今に玉川に累代の汁物(ヒツ)とも
鶴鷲は散後箱 若 乃 花 呂笳



是より狩川と云里より如ゆ寄清河よりの驛路にして
むかしは鳥川と出るよし三ケ沢添津なとし云村成ゆへ
添川村より出るなれ添川といはしへ加戒寺と号して羽
黒八千余坊の中なりけるなれ上旬館(タテ)といふ館の
詞あり上旬の事来り記して

佛名(ノウナ)坂

是より右のかたへ見ゆる古へは取り薬師堂あり今
は手向(タウゲ)といふ所をづまり移をそのうへ三世の佛名
を唱へなとしけるよりやその名ゆへし

衣裏の月扇より移るやぶりの坂 羽黒 独歩

をとなへしまでつけ移とく味背とや 今 梨水

五輪森

蔬すぶれ貪りて頻に蚊やり一物 仙化

上件所々従最上趣于羽黒山路筋也

鶴岡

先より又越後海沿に羽黒へ趣くの道筋やはり不
酒井左衛門尉城下也古記領主にして城中郭外武
家やしき并に工商の家々懐恵まそくしたがく
縦歌の嘔唾する市人の言語倍々然として盈耳
其城下乃内七日町といへる不旅人の驛舎なりしの
所にて人判をあらはせん山へ乃先達とするの羽黒へ
[illegible]

梵字河

城下を出て物まつ川あり往昔湯殿月山の苔の滴
より弥陀大日観音乃種字この川に流れ下りしに
よりて今にその名後流布にて稱せるなりしに
川邊を鳥居川原といふもむかし羽黒一乃華表
にちかるよし

結ぶ事の雲も清し梵字川 助叟
春にかくし柳や捻海ぬむ字ふ事 一蜂
蘇の新しそれ物り保武字河 江戸 倫々
藻乃茶ちり魚尾も垂露し梵字川 今 倫声
青柳や色はしめ紀が糸ありよる 山形 窓柳
蛙まで阿吽ぶさめれかんし川 米沢 九々

活る点れ遊魚や度所保むし河 會津 苔水
いかに契りて周代物をたいれしハ
かつらの川の事とも
觀ミさバそれ不生に立てく鶴の繩引 東水
水ケリ れわるる雪れ詩も梵字なる 李山
きめしへバ三角ハ柏も 巴可 角 呂茄

分川

川をわたりて向ひ分川といふ不あり昔分川れ城主
とて何がし乃きてしまりし雪ぬり羽黒ハ信仰し尤
能除太子より帰依せるよし西南乃当り毋得山金峰ボウ
山見ゆる赤川村松尾ト村 祠ハ貢布袋ヲ など羽黒より由結る
不なり小れ宮を酒田袖浦乃眺テウバウ望乃ひ鳥海山
をひんまゝ行

鄽ミセ かし馬ハ浴ガねど 簸ヒ れ 学 浮生
喰物もありや松尾れ 桐園栗 惟然
流漬ナブサメ るれ矣より鳥ハ菊乃衰れ 呂茄

酒田 并袖浦

酒田又ハ龜ケ崎とも云ふ代物りて城主の領内に
して此不ハ一城あり西國方運送れ多く成る
湊にしく萬戸摩く且暮乃煙むなしかれば則ち
海濱より袖乃浦あり

拾遺 巻五

よしん志ろ行
君ハ ゆる浅乃ゆく浦袖の浦ハ君ハ同茶と云ふ待ぞしぬべよ

金葉雜上　平康頼女

なぶねをしる蜜乃志ほしぎ[illegible]に袖の浦とも行[illegible]

新古今雜上　中務

袖の浦は波ぬきたるを[illegible]小雪[illegible]上と流しかるゝ

新勅撰戀四　前関白

うしかゝ思ふ物からぬるゝ袖の浦ひたり右にも波やゝ門覧

同上　侍従

[illegible]俺ぬ[illegible]袖の浦波

續後撰戀二　[illegible]通憲

君[illegible]浦と[illegible]ぬれ[illegible]袖乃[illegible]

續古今戀一　泰議雅經

りふまりや人[illegible]心[illegible]浪[illegible]袖[illegible]浦風

續拾遺戀五　常盤井入道

[illegible]袖乃[illegible]波[illegible]

新後撰戀一　祝部成茂

袖の浦は清の江乃[illegible]

同戀四　高階宗成

[illegible]袖の浦浪

續千載夏　祝部成賢

[illegible]袖は浦[illegible]

同戀一　三条入道内大臣

[illegible]袖の浪

同戀二　前冬議雅有

あるは衣ぬれしに袖のうしろんてしも見つかめるばしさにとも外ゐれて

同上　為道的信

志しせばやゝ三つ先ハうしろで朝夕に渡こそ袖のうしろみありとし

同上　従二位親子

くちのたゞ袖に浦浪かけてぶに人をこゝ所先ハ粗なるれぞ

同戀四　亀山院御製

年月乃あまぬはしさ後かさのてしも粗をもち渡る袖のうし浪

新千載秋　菅原宗泰

藤塩くむ袖乃ゑし風をなれば和さでし雲や衣ゝ同らん

同戀二　雅大納言公忠

志しせばやより初物りしみる先より後ぞそかゝ家袖の浦なる

新拾遺旅　法印源意

船を先くし所愛袖乃濁風をとまるもしまつ渡れ桃にぞさく

同戀二　為兼

雲れよ所見る先ハ余不れ拾りにくく塩干しまつ袖にし浪

新後拾遺春上　御製

春にぬと霧れ衣をもりより雨ど後に所家袖乃うし浪

同戀二　よしひとしらば

三所ゆる見塩れとるゝ雲なれぞ袖乃ゑしにぞまゐのてしらん

同上　正三位知家

暁れ別きハいはもかゝ衣ぬれてぞかゝ所袖のうしろなみ

新續古今題一　洞院攝政家左大臣

悪びかの塩干しきらぬ波乃音成れ行明よりとる袖乃うら風

同題二　源家長

夢ふぶにはかゝりもなくて明るる夜れ西とそ夜れ袖の浦浪

同四　按察使資明

立隔りあふ夜と行ほとぞ君よ別生し海の袖乃うら浪

同五　平忠房

蜑衣行いかすもん塩くまぬ方ふぶにぬるゝ袖乃浦波

同上　進子門親王

蜑人はん玉藻かり海を袖乃ちに家立ぬれぬ波のよるく

同上　一条前太政大臣

さんし新浦乃底りふしけふる我かゝ夜の袖れらしなみ

同雜上　權大納言經豊

あ海人れ衣ゆとまもしきら雪はん流れ代かゝ海袖の浦浪

右所百首の中より題成

法印季吟

忘貝ひろせとをれぶ立隔り又かけうふる袖乃うら浪

[illegible]

日は種をしいかゝぬら海ゆんを旅衣たゞ海おしき袖の浦なき

さるましらろ遊行上人は所りいたりく

かくとくふ藻塩乃枕安わびぬいかに

別ふし袖乃うら人

遠望

おぼろん山や吹浦うけてくらす　すぐ貴　芭蕉
異なき日成海より入さりも加ケ川　令
海上より堂を拝しくほかくさを　沾洲
出てくれハ月を雲乃あるし所よ　惟然
紹巴まそ袖といふ紛じ濱れ月　呂丸
はぐれや簑より那く袖乃空羅　清風（尾花沢）

鳥海山

あの山鎮坐（チンザ）乃神一記まそ大物主神社と以通りその外
山内乃事實舊記未覃（ヲヨバ）所覽ニ志げしくさし至のと康平
年中栗屋川次郎安倍貞任（タウ）同宗任反逆の時鳥海深
三郎ハ所にしもそまく籠まくるよし物まく中傳通りと
乃かたら富士乃姿ハ見えし九箕れ天りも殘雪班駁（カウ）
り云りおれ玉乃中にしてもこのまちよいおしぎれ
岌嶽（キウヰ）也アルとの識之ヲ

時しらぬ山ハ葛乃根こ氷（氷）り餅　浮生
雪れ鵝の雛し花なりけるの海　風水
鳥乃海なしばおもの　釣むまり　不玉（酒田）
鳥海やさつ見の面れおかり　際　重行（鶴岡）
塩屋や異ハ往とゆれど山ハ　東水
雷れ沉む咀合（ソアヒ）やとるを乃空貴　武仙（羽黒）
琉璃光乃空に箕なし　呂沼　山

象深

多海山成ゆへまはれば象深なり能因法師が幽居の跡
西行上人乃老木の桜九十九の嶋八十八ヶ深かれ是
以ちぐ詞より字さば筆より雅さの此景成ゆへさんとぐ此國
乃名ぬぐらゐなれば席(ツイデ)を得ぐ弱(シ)るより記(シル)そのと神功
皇后の清陵(ニサヾキ)とくあり寺ハ千滿珠寺といふ所りそれ
縁因ゆへし

後拾遺旅　能因法師

世の中をかくてし経りさち深の雲の苔屋を我宿にして

新古今旅　顕仲朝臣

ちすゝ物る我身にしあれば蛸深や雲の苔屋にあるまゝ旅の

西行法師

我侍深の桜は浪ようにはれ花のとゝぐ雲のはり私

ちすゝ此の行脚よ　遊行上人

いかとは思ひをこゝろ象深の苔屋に私風ぞ

江上の縦横一里あまりにして侍ハ松嶋よりはひて又異(コト)
なり松嶋は笑ふがごとく蛸深さく恨むがごとし寂(ジカ)さに
悲(カナ)しこれ人を感ぐ地勢環成物やまそに似たり浪
乃折入る西成沙ちしとゝ

さち深乃月や流人をまそまけぶる　釈澤菴

ちさうゝ雨や西施(セイシ)が合歓(ネム)のまれ　芭蕉

沙ちしや霧脛ぬ待ぐ海すゞし　令

旅寝せば月見ん蛤　小松ばら　一晶
西行稀　本法の関に笠捨てより　三千風
鶴の孫そよく見ゆ鳴き新乃海　山夕
浪越ぬ琴りありてや　雎鳩（ミサゴ）の巣　曾良
廉梁（シヽロ）とく関屋を形ぶれいのちぶり　凍雲
水やせし翠乃生絹（ヌヽシ）ひろげ　呂丸
蚌深や鴨の踏めくうもどかぬ　則堂（亡人）
こきりこや稲はこぶ乃尻をおもて　呉柳（狩川）
蚌深や首ひし出せ屋ぶれ　蚊屋　清風
静はさよひらぶ　寧（ナメ）とく汐乃あし　東水
こきり深や霧に川本えぞしらぬ　呂茄

八乙女浦　附熱海（アツミ）

是ゆゑ蚌深乃續こきやそのうゑ羽黒権現此所より瑞光
を輝（カヤ）りし山頂より移りまし給ふよし則海中に石ある
鳥居あり今に至りてこの月より文月かけて星河
さいやうの見る東にこの沖より龍灯あらはれ出て半天
より昇つまて文海にて落てその光清をかゝ不思議
豈（アニ）凡察ひ及ばんやまた物ならず修験入峯乃時ばかり
羽黒山より遥（ヨウ）拝の霊地なり
八丙会に川娘のあらぶ乃家に　清風
笠来より汐路や那く八（ヤタ）咫れ月　東水
是より南の磯多くに出れて熱海（アツミ）といへる一邑あり小海に

近しといへども土甚く草洞ゆゑ詠れ山より温泉
漏出て諸病を治す苟(マコト)り奥羽両國の老ゆゑ遊賞
乃佳境なり

蓼郎とまた海原ゆゑ浦先の姫 伏見 任口
浦原より藤代浦をくゆゑ故やりうる 江戸 鶴里

右酒田鳥海八乙女浦等ハ記(スル)途中ノ遠望也

荒河

是ハ往還乃路筋なり川を渡りて小さる程森あり金
澤官といふ青奥州秀衡(ヒラ)病死のち家嫡泰衡従(テ)
頼朝命ニ殺(ス)義経於衣河館ニ頼朝又攻泰衡(ヲ)正(シ)不臣之
罪時郎従照井金沢なとといへる武士のあり

しきりまひ生を畫し一社より祠られしよし古ハ
人中傳へ来り

まこ乙女や男より投しとうがらし 東潮
結まづそもくらら栗や木の葉ハ掻(キ羽黒) 久武

是より茶川なといふ村ゆゑ野荒町(ヲ)と云村へ出川右の
方より玉川村といふあり寺ゆゑ玉川寺ゆゑ古へハ羽黒の
領地ゆゑして玉泉寺ゆゑしるよし天台山の流れを渡る
町ゆゑ号(ナツケ)よりたんを今ハ禅家の法崖(クツ)となりて古ハ
宝物なと今ハ絶せり

神路(ガヂ)坂

松の山ゆゑ通りるゝ向の町より入それをわが(音)神

此山へ現坐ゆゑあるおしとは山下よりみるせ給ふ事なれ
かく名づけ給ふるよし中傳屋より

山伏ひり鼻ゆゑ雨まつる雨尾笠ゆゑ風　東潮

入門や左右左恵みて雲ゆくら　羽黒　天立

一歩進高神地坡　瞻望絶頂若盈科　令　南枝

松風長入路人袂　洒掃凡情思不他

松深し山寺ゆゑ苔なくて千とやゆる　令

山乃序成是やあやどる松乃まれ　令　白藤

中ノ坂

坂乃古所とより立石あり辨慶の礫石と中傳ふさもし心
乃ゆゑ紀事ゆゑ弁慶ゆゑ登山ゆゑ打物ゆゑいかゆゑ事なれ
ゆゑ至りんゆゑし

赤坂

薬師堂あり昔は佛名坂ゆゑ名なるよし

赤坂やむかし作り乃山ざかり　庄内　定頼

夜うつ手習り多し　十二神　令　李山

念佛堂

称名山蓮臺寺と号す武陵ゆゑ人あるゆゑの為より發心
修行しては下りゆゑ念佛の一宇を造建し今ゆゑ到ゆく
信心帰依ゆゑ者終ぞ六時不退乃道場よりその境内
あゆゑ乃墳墓ある中より後原氏元應二年二月九日と
あり　後醍醐帝の年号なり　苺むしとる石増いかゆゑ人なりけむ字

雨かし

茶臼にハ泣まいものし 花尾ぞ好 山形 出窓

滑河（ナメリ）

念佛堂より下れる町並也 此ゟ二ツ八日町と云此町
中ゟ流るゝをなめり川と云金剛名ハ来なり

焼岩すや合掌ゝ 羽黒 黨堂
戯ふる夏山ぶしや かりせん宿 莞兮
渦蓋ハ底りみやげやかきつゝ 尾花沢 直水

金剛水

金剛樹院乃地内なり此寺ハ今三十余坊ハ内ふして
極楽ゝりおりむかしハ来迎山千勝寺とゝ六百坊ハ頭

ふして異験ハ僧侶住持をり今に来迎が池といふ也
名となりされば此清水も貴記也乃修学の物金剛
堅固乃加持ゟ二ツとかくめでゝ記冷水を湛（タヘ）しりけん
炎熱の打ゝ人ハ頻るなどふ此水ハ用ゆれを験を
得る事今ハ時々なり

中旬館

むかし羽黒八千余坊ゝりしゝ時年中の行事
繁多ふして寺務三人を置て一箇月乃うち上旬中
旬下旬ハ紅行ひけれど是ハ三旬とし三長吏とゝ云り
此所ハ中旬なる人住けれ其中旬館といふ事ハ
深川村上旬ゟ皷例之可知

當山往古ハ衆徒中山代隔ニ居住し修験社家ハ
七千軒余ハ以ニ爲ニ故ニ從ニ黨蜂ニ起ニ不ニ致ニ鎌倉ニ執ニ推ニ
ものゝ訴ニ悪事停止ありて國民ゆゑなりけるぞ
それ法最明寺時頼回國ハ砌この山本堂ハ兼仕をはとめ
三ヶ年送り給ふし古記ありあり猶念法師府のうち
當山乃探題ハ梅津中将殿を被下ニ盃中将殿男子三人
あり當山長吏職を被補一ヶ月小十日替りに仕盃を
被依ニ上中下旬といふ上旬家老大田氏中旬家
老三澤氏神林氏下旬家老真田氏吉住氏小関氏
なり下旬未来ハ近代ハ此ゆゑなり此年ハ法常善塚と
云し人是なり

的場小路

町乃内小路の小路あり毎年九月九日鶴岡城主より年
行人等来て流鏑馬の神事ありしより記せ的村
あれ原ぶさん乃的成出せ村なり松尾とも牛久神領
の内村くより清原料成貯ひ出せ故実なり

池中

あれ和むかしは醫王山機乗寺と号して五百坊成領
しけるよし今は修験在家等所成交るより石の橋あり
當山前住持天宥法印彫刻(テウコク)の巻々あり

雷電石

いまし雷電吼(ヲ)菩薩成崇(アガ)たる所ところなりけるに

おの石今に於ける人家の背戸にあり不浄を觸る
時きそれ人ものゝ病ひ得るなりしのあるに雷電清
水といふあり むかし乃閼伽(アカノ)水なりしるよし今よりけり

石坂

おれ下にて往来の人馬よりかゝる面しすゝめいらせる道
右の方にあり是より上ハ下居山中禅寺といふ音二音
坊乃境地なりしるとかや是より山上ハ古来よりも雖
あらぬ出をもてなしいかゝる故にかゝる奇特に於

引摘堂

引摘の弥陀如来慈覚大師乃法作なり是より堂社
投くにして一ヘにて挙(アゲ)ゞし佐久間の大月などゝ
奇特なる事あれども繁雄をいとふ

黄金(コガネ)堂

應化堂といふ三十三軀(ク)乃観音いと貴く並びおれ
しまは則羽黒權現三十三の應化身を崇まひしる
かゝれん草剣いぼれ乃法ゝや中来(ナカコロ)武将頼朝卿
羽黒修造なりしより土肥次郎時の奉行を取りしる
よしそれ影像今にしは堂にあり像の裏にし漆書
土肥次郎實平(ト)あり福岡村といふ所より実平塚とて
今にあり家にしも生を終しるまや
文禄年中耳糟伝後守景次おれ堂ハ再興をとゝ
むしに堂のおり惣輪塔なりしより堂の後には天神

松ところ周圍三かゝえ程ありて二ツ俣にわかれ枝をかはし
たりとぞ此ハ五十年あまり以前まて此松の木枯たりとぞ
みなと語らん根だにさへなく成にけり

花さかれ露ぞ潤ふ　　馨比音　天立

流季とはいゝし清法の金残る　　李山

あはれ時を募りし実あれ金衣鳥　　呂茄

観音堂

十一面観音なり此主ハ下總國香取郡福田村
伊能氏何某といふ者にして年法三代清山浄信
といふもの関東疫癘の妖孽をおそれて此者の
家内ことく二月二日此内より牛二疋ありける主いとゞ悲しみ
思ひわれにも此力わく病ひの重りて盛衰
をの程ある牛なしの葬りなんとゆるハそのわたりこゝ
かゞるうく疫氣に取れぬる事はこそ我家に果りたん
ありし者此後一家の内も絶く終りも疫神の難ハ
おそれはそれのみかへりまれかくおそれるやいよく
三乃山此霊感を貴とは人としてはなさぬおもて奇
異の感を催かしまく唱仰乃心深かりしは此観音
をも納し丹誠追日厚し神威是をに限らぬかをし
近比年此事から此堂の莊主わればとも家を記せ
ありけり伊能氏さいはゝ身の内かゝりし者
亡くなりて追福として依田あつめて奇附されたり

大宅三車を清算屋の蔵にて年より此年も
いかるる若因とりなるべし

荷を脱し三門の車の法の里の苔　東水

蝦夷（エゾ）古館

おがね堂のうしろより鉢の絵あり往昔蝦夷人此所にて
来り住けるもの也あり不動石といふ石あり来降し
給けるよし申傳ふ

館や守れ鶉となりてもしきけき　東水

釜清水

むかし大衆舎席の柳用ひたる大釜とて中清水で
二門の釜ありけり一門は此池中にて沉て焼ことば
あがらせ今一門はおがね堂の鳥ふかわり釜堂はれなり

日より障ふ所もの薄の乃ちじ先ぶ所　鶴里

蔵にくや煙も結ぶ浪の底　久武

正善院

黄金堂の別當なり是も三十余院のそれ此ものに
ひちかり御堂といへ所人住居せしが程所く院職を
辞し林下の幽閑の事所源に来ば其なひうつ俳
偈より焼けりとく呂丸英士が風義を慕ひたく句く
秀さりし小五とせあまりさはり身病なるも吟友
乃交ましれがたく存命の一面句は宴りし志所傳る

やうろ〳〵寝醒るや屋の海る春　即堂

水音のそろまとも来たり　杜の門

病牀吟

昼れ蚊を小ばしとしかつて枕とと

辞世

水無月やゝ今ぞなる陰ある雲の雲

下居宮（ヲリ）　附閑伽井

二王門より奥なりあれ宮とゝ小なる紀丘（ツカ）あり社記曰毎歳九月晦日三山権現下山（リ）十月朔且神幸（ニ）于出雲州大社（ニ）同晦日帰座（ニ）至（ルマテ）十一月九日下居（ヲリ）此宮云々この榮今小玉門ゝ年々中冬九日湯れ蒸成なり一年吾也れ神院あり則天下國家山上山下れ吾禍を院示し給ふ昔ハ山の魂行臧十月一十月里坊よ

ありあれ神院事畢下ゝ山上せり思ひ出り諸社の陽旅所とゝ云ゞとし

ありあさせ給ふ陽行やいたゞ　羽黒　幸信

汝（ナレ）とハ神とおぼしけ　此紅

猶（カケハシ）なり桐やおりあれ　李山

白木綿なり康静なり　付稼へ　呂笳

大黒堂

人皇五十一代平城帝乃陽宇大同二年に静傳法師配流ゆゑ此國より来ありしかり傳教大師陽作の大黒天成安置し給ふ中傳ふ堂乃僧ゝ大黒松とゝ大なる一樹あるゝ小けこゝろ柏果ゝ

咒小肥とく蛇より孫彦 宮彦也 李山

桃清水

大僧正行尊ある山へ分入まゝ附近里悪疫ぬ悩しく
ゆゑ小行尊ゑとり乃桃実ぬ拾しけれ水にて呑
三ヶ月ゑへも病ゑしまゝ愈(イエ)ゆゑよりかくゑ名ぬけ侍る
と称り

桃清の婆ゑ子ゑ世ゑ夏源し 羽黒 安心

行尊塚

所より南の方より安養山といふ山より柳ゑ此僧正
の事三井圓満院ゑ碩学にして白河院清崇仰他
より異ゆなんあるく霊験高徳峯とく尊しがるし傳記
の繁見ゑ中よりしらべしく異記とする事如左

系圖

三条院ー小一條院ー源基平 従三位号御子宰相 行尊
又白河院之猶子となりて十二歳にして薙髪(チハツ)し三井の
明行に従ふ十七歳にして峯入難行を勤むそれより
験者ゑ名ゑるく永久四年補園城長吏保安四年任延
暦寺座主長承二年勅為衆僧之上座居于三井平
等院とく称ゑ小その後り称ゑ不諸僧にしてゑるさぞ
法國拝擻(ソウ)の法ゑ此山にしし錫ぬ掛ゑひ當学ゑ
修行ぬなしかひ法ゑり此不小身清りかすいきん
一門ゑ百墳今小称れり寛永の法麓より傳ゑる衆徒

持經院心ゆゑある衣着ゆゑにて此塚の中より一つの金
れなりて行ける師大峯修行の時よりこれひたるところ
としてり衣となりへ山猿の歌ゆゑ金れり云ふしたる
とゆゑ（サメ）ぬかくれおとく成てこと三度まゐる程れし
此墳の邊稲荷大明神を祠至られは是ゆゑにて穿ち
ゆゑにて此黙（モダ）止をり二百年已往今にて感涙袖を
ぬらすものなり

龍膽も春あはりいざおらむ　惟然
旅疲れ衣となりへ　猿の　実（三）　風水
佛ゆゑ蔵ゆゑ衣や　雲乃　峯　羽黒　峯月
松笠の雪や　ゆゑ　ゆゑりとし　令　千露

にけきり領ひ開ひて金風花　令　子枝
寺ゆゑ出て吟しおさまりし猿ゆゑ　令　東洞
清の塚うく掬せよや　蔵ゆゑ　羽黒　柳也
實方し居しぞ猿ゆゑ　掬いたぞ　藤嶋　立宇
霧ゆゑ久米詠乃橋し天（マ）甃　巾　呂笳

峯ノ薬師

此堂は當山入峯修行の時修験行烈繞堂乃
をがら拜ひてゆゑにて乃屋くしとゝ
野し山も茂生て流　璃の世界ゆゑ　岩城領主　風虎
ゆゑ出の散るの雨さに乃屋せ風　浮生

荒町

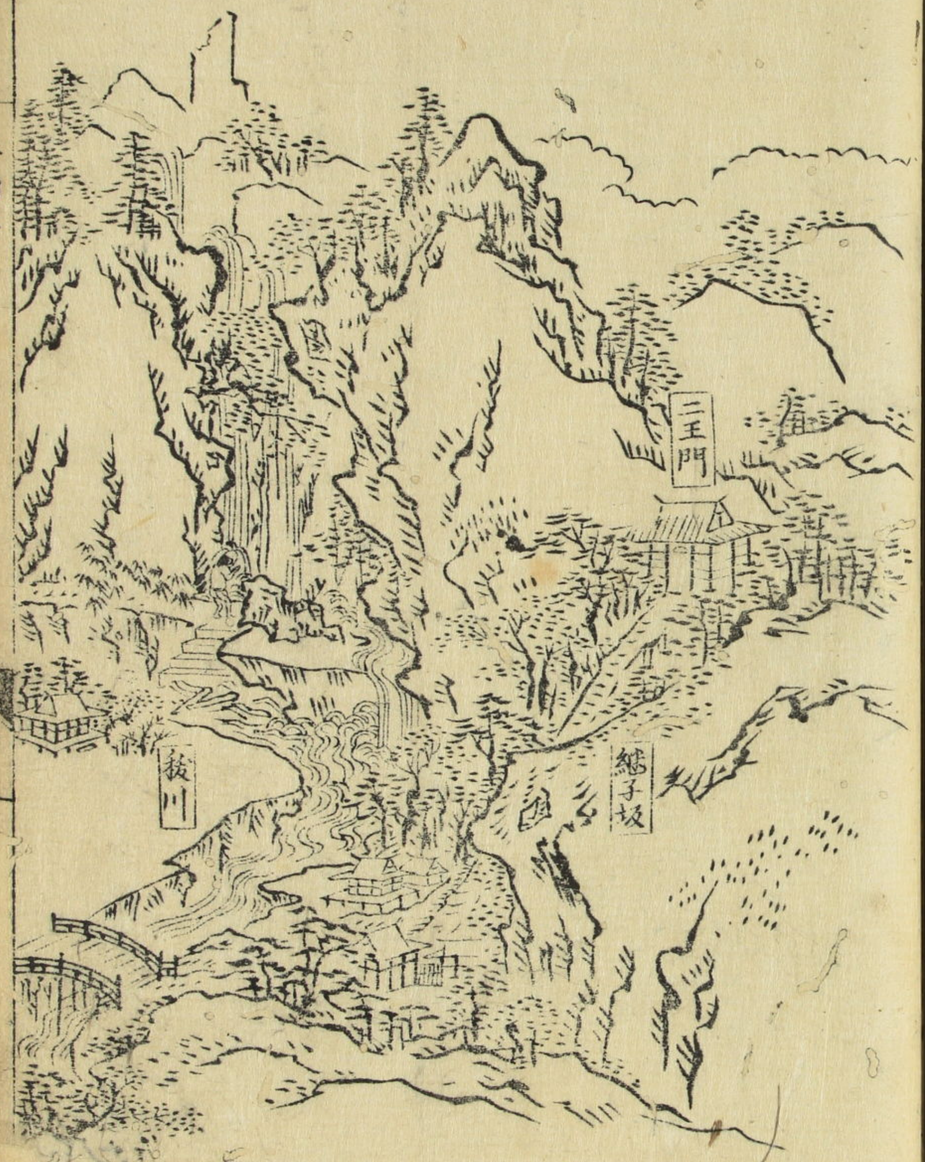
これ町むらしに學頭屋しきなりそれ外福昌寺傳心
寺なりといふ大なるに寺地なりけるよし今此町の内康
嶋石といふ石あり町内乃鎮守とて
毎年當山禪定乃砌ゟ旅霰とて一寸四方もあらむ
撥餅ハ道ゟ商ふ事おかしき物なるべし山家の形
容より似合ふ旅客名物と賞翫せしなり

執行清水

海町と云所ありそれ流ハ是澤と云往来れ乃筋之

烏崎

舊記云能除太子至羽峰時樹陰深鬱而殆迷岐路
時有翅八尺靈烏三足來道能除臻羽黒及月山等乃至
太子歡然而歌曰
彌也喜茂禮遠能我播倶魯能也磨加羅須軻珥良
迺志呂久那良牟誉滿天母々々
蓋此山萬々歳を經ハ嘉瑞と如此れ禽鳥を示され
ゟ事也烏れ頭ゟ向く所とこわゞ山れ宮本ハ守せ
との雅詠事のもとにもいふ　祭なし今小玉にて
山上山下變あらん時ハ三足れ烏みな白ハかりもの
出る事慥ましてあなれ
曙や雲をりこ河と箕　本立　神叔
星非王よねさつき闇行のかりもを　呂茄
うれ雲や合点ましまさうしを　崎　柳也



稱小路

是より上後瀧水寺光明院と云昔ハ三百坊を領ト
其間とかや此小路ハ入口より天拜坂と云不行つまこれ
能除太子天童をあし給ふ一所ゆゑかく名付たり也
中傳ふ

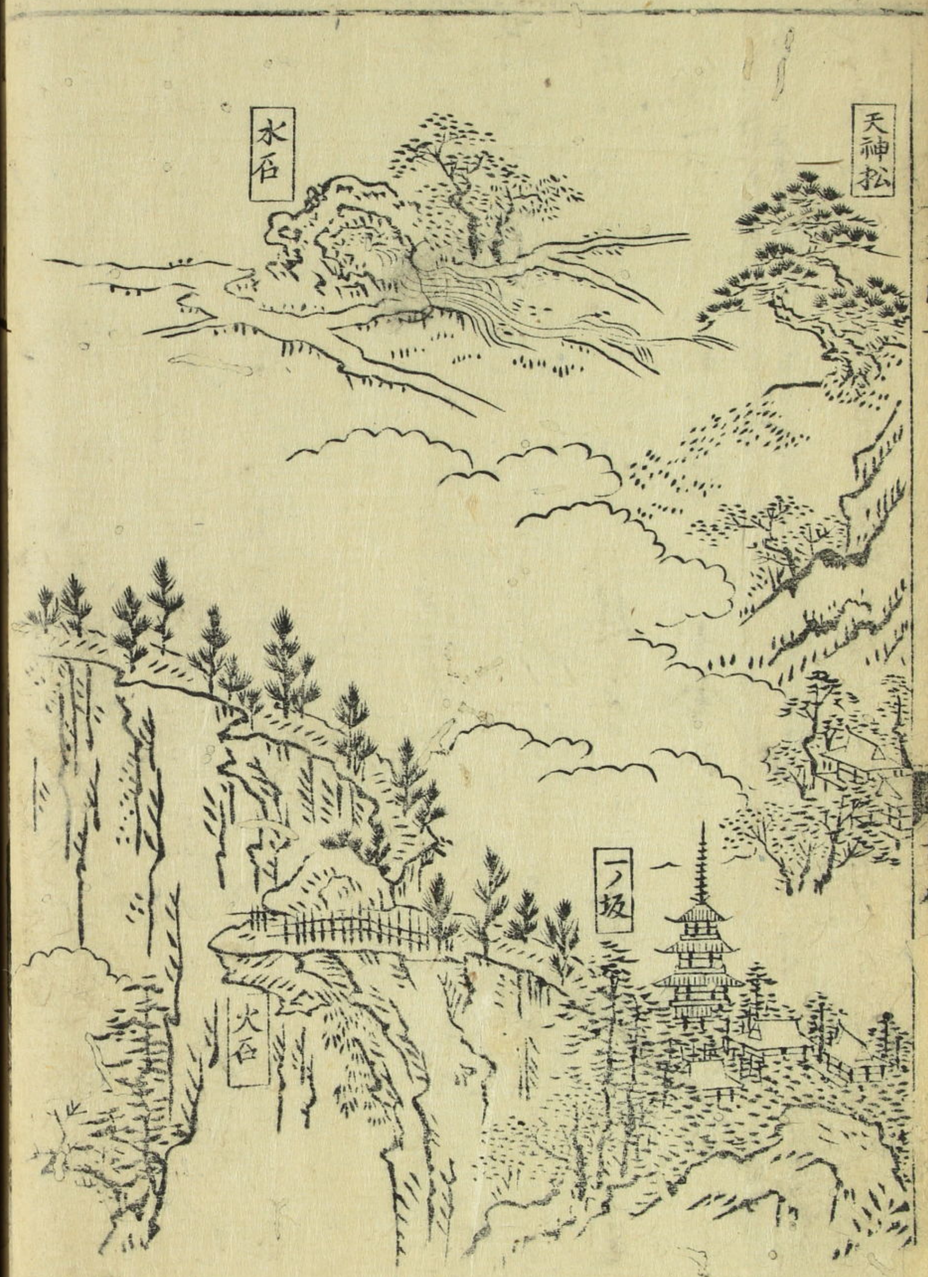
上雲町

古墓町（コバカ）とも云是より荒沼ハ方へゆく野徑あり

下旬館

此ハ下ハ光明院主住ましかゝ院主屋鋪とも云今ハ
別当里坊屋鋪と称ふ上下旬の事ハ上（カミ）ハ出づる

稲荷山



古より稲荷大明神と稱ひ奉ひ山内に苔山あらん間
必神告ある事時々やいふしへまこの鳥高嶽なるを
ゆるとなんこれ澤鳥ハ悪澤といふ
水に尾乃稱ぢ作ゝ事さりかきのなる　呂茄

二王門

これ二王尊ハさらまし比湛道にいへる禪家乃徒權現へ
丹誠乃志願あるまゝなる小や一院を辞し此所ありしより
居ましたまゝの佛像ハ建立せんと發願しこの二王尊
し造営より右に脇に小舎ありさらまし比関東より
牛を奉納して寄りはるゞを備ゝく牛ハ湯殿權現の
仕者にして首より繪り紀てし納めたまりしや

継子坂

むかし此ゝ所に女の間にしき中の子成悪くほしく抑せ
此ほとりに捨たりしかるに其童乃這歩かゝる石にまちハ[illegible]
足の所に於りきるよりかく名付しと青柳の事佛ふかゝる
縁より山邊小子安地藏などを安置せる事となりぬ
誠に身に間されぬ物なりきつゝみどりすてやしぬ方なく
悲しけれどしかいふ哥を西行乃来りける物に引て判
じけるおとくいふ物なる故にまたかゝ所哀れを殘しけん
後世更ニ忍青ヲ

下坂(ヲリ)や本くれ上ゆく　目語乃花　介我
物さ毋かり蛍や金しき宕佛ひ　羽黒　其翠

それ毋かり淮ふ汁や鬼あきみ　鶴岡　李夕
きぐえんより石に落ける秋の蟬　山風
おてろせに花ぎしくの間ゝ子坂　呂丸
便に物さに椿に稱ぶる　きふと草　李山
むぶゆるをなぐさゆんかの門木瓜の花　呂笳

白山官

坂氏くれば右の方本立乃中より勧請をし所なれども
今ハ官殿廢壇(ハイエ)をり修験入峯の拜所なり

稜川

苦へくぶれハ中の橋ありきしひ川と云柳此川ハ吉源
湯殿月山乃西間より流出来る程清水にて往青

より及ひ近き世に至りて年々諸人身上の凶事
又は國家の禍災ならひ荒和(アラニコノ)後終年のならひ
名賢高緇(カウシ)しきの門に下りてみそぎをなしまるよ祝
ならひ門と名付より此所よりいよ〳〵控現瑞籬の
内なれば往詣の人々身心を清免登嶺すべきにぞ
右の方に瀧あり倶利伽羅(クリカラ)不動の鑄像水中に
ゆふ澄り落る飛泉ハ朱夏玄冬にも白布成にしし
あたかも銀河の九天より落るとも賦せしにしきと
見るより六葉に成清ふ

祓去(テ)九塵(ヲ)浄(メ)有川　委(スル)波(ニ)日影一縄金　釈　實傳
金縄界(ヲ)道(ヲ)瑠璃地　瀑布垂(ル)幡(ヲ)千万尋

次韻

人世塵垢茲(ニ)祓川　心身潚洒(トシテ)浄(シ)如(ヨリモ)金　釈　海秀
岩前仰視(ス)一條瀑　彷彿(タリ)飛龍下(ル)百尋(ヲ)　酒田　政盛

千首和歌は年納をし時
され山より清ふでく

ならひ川終ぬ流出に出す有乃いで羽れ山や狩てくるん
水きらや和かぞ流らくとしわとれ　素堂
栗笑(エン)ぐ不動れ怒る深山かれ　京　言水
嘘(ウソ)はきりし涼しかれとやならひ川　里風
欲垢れをちさら人やいらむ川　桃隣
単刈乃野麻母のしん　後河　風水
皆さりて新涼起とり稲れ上　東水

身よ垢よ十丈ほ川くて瀧すぐ英 洲水（ゝの村）
雅カ浴衣枝ゝり目せどう川屋しろ 親福（羽黒）
ちらひ川白玉涼し こうう塵垢離 旭堂（令）
鮎落を石ゝり飛鳥れ新もなし 梅露（令）
目起とつ粉ゝり砕くなり瀧津川 孤鷗
同も穴ゝり霧乃布に安ゝらぬ 幸信
捌らん星合れ瀧も あら瀧川 南枝
清くだふくさいい宕なり安乃瀧 其翠
瀧壺や云可有ゝ落て荷葉形 李山
彦星乃身錯ひあるもちらひ川 呉柳
後川や道者も雜 惟も深く地 幽窓

雅鷲れ黒や形ゝ稀く根芹とハ 呂笈

不動堂

瀧れ中段ゝり立給ふ尊容乃前立なり古へよりあらう見
僧侶時く此所ゝり筋ゝるよし中伝へ

念佛堂

和光山同桂院ゝ号そこれ淺道此所ゝ道れ居て不
退乃念佛ゝ行ひなりおこ形ひなり此人も極形く身清ゝり
とるゝ六八れ悲願ゝり乗じ今ハ西方の宝刹ゝ至られ
なんと貴くぞ思ふん侍ゝ

遺るゝも思ふも巻一重ゝ郷 沾徳
松乃戸や段中の底れ市ゝ墓 雁山（江戸）

律院は昼より来し　海棠　東水

八大堂

八大龍王は祠し一宇なりを魚とく堂廡（ブ）は模様意鰐水波はかゝらは彫付きりこれ堂のうしろより相生杉とゝく幾年来を経ゝりとしたれざ所杉ありは堂よりしてかれ来り取り折く竜形は濱る事なとや傳ふそし此山の檀現と龍形は神秘間しまはるす古人の一説付きは榛より八大龍王の鎮護しかゝ事實は示しまふまゝや中ゝおろく数こ我ゝ為ん待待

五重塔

本尊は正観音薩埵脇士は軍荼利（グンダ）妙見の二尊也

義平年中平将門建立之とや傳ふ朝敵叛逆の心とゝかゝ所結施をせられしすいかゞ思ひ得るに武蔵國神田社は社家は説より大己貴命を崇めしといふ杉道春が神社考に云は将門の霊は鎮メ来りかゝ年ゝ云乃塔の發起し慥する事跡因縁かあらん追て可考

應永五年前駿河守藤原朝臣氏家再興之同六年癸丑六月入佛供養時導師天台沙門観學院尊藏と古記記録りと先起より塔は四方に法報應化乃四字額あり小野道風の事所より中傳ふり

高顯幾層雲幾層　層天無翼　一飛樓　釈實傳

脱簦仰見斗牛際　四萬由旬倦望眸

次韻

孤巍宝塔玉稜層　遮断太清隣月樓　禪光

一迎慇懃三拜立　堂中聖顔共青眸

今一重震ひ給しく　はぐれ雲ゆ　羽黒東月

白雲より九輪のせなり　山さめら　旅人三扇

學頭屋鋪

塔乃至小あり羽黒代々れ学頭職は所に住をり上に小
いふ為義師し夫験高徳れ僧にて男康嶋神社成
兼帯をり六月十五日羽黒山乃祭祀事畢ゆるく又男
康嶋の祭祀より參ふ凡その道程三十有里と隔れり
同日れ内ゆ役所より飛行をりといへりその外天下大黒
年為鹿民祈雨於待竜池遏誦法華請雨等經三日之
内洪水霑地輪云々この外拳く算へかるし道智尊量
等の結便は所に住居し又ハ荒町宝勝院に住をり

天神社

天満宮成崇ゆ數鳴れ為成初ゆ事れり深より向
ひれ峯小天神社にあるもの外大日堂観音堂普賢
堂等境内より並居り

護摩堂普賢堂

右南領にして二十余頃のこも間なり事実略して

一ノ坂

普賢堂の前より八幡坂にまゝく石階六百七十間余
前代別当天宥法印寄附ス其の坂の右の方秘密山路
といふ谷あり

火石

一の坂の右にあり其の石より西南方に当門と南野と
いふ所に石清水とて水石あり是こそ出羽の二つ石
とて古往今来詩に賦し歌に詠ぜ仰ぎ二つ石の
事は陰陽二氣の寄寓にて火石は陽雜氏題し
森羅草木の前を陽雜氏前を今に至門と周冥の
夜に光明蘊かくれる煽ふ出る事時々や渡海
の船人はひより氏目路にあるまじあるより水石は

又雨霧の潤澤氏ほうさどり石中より冷くなる霊泉
を涌出しその流をとゝく數前の民草を活しいかなる
旱暑にも絶を奇く妙くの秘あとや伝へたりその水
石の流より下氏玉河と云かゝ海二氣乃是石深山迷谷
を隔てる事是又その名にしたる所の相生の松かん住者
かし境地を隔てる事あるしかさしもあらずわが山の
なる陰徳陽報氏ものの石より能けし行末望氏國
家のちより山上山下乃人法ちく退動なくしん事をふ
し給ふり往詣の生勝等閑の看氏なしとなるかれ
いとんや山内に居氏卜海を信ぜしかるかや仰ぎたるや
鶴の岡の英士榊原氏水軒ふて河石と云陰一巻氏

綴りて此山より送る程くりしくハ社記古録等より詳なり
甚深也奥秘や書不農史れ云傳通ふる口ぶさしに
おれなりふ心成とうぐ嫡ゝ石の楊も孫ん中の聖りハ
數やり事や女れ斧ゝ石成らし　嵐雪
石れ光の新や龍ち海岩はくじ　亡人 喜運
雲木ゝ稲はゝ乃根や嫡ゝ石　江戸 倫水
稲雲ゝ郊社れ礼や山ゝ石　羽黒 孤鴎
ゝ海ゝ漏れ稲成原山や石清ゝ　令 不及
わらぶるまゝ山ゝ極れり嫡ゝ石　李山
光と深れ中ぎゝ深し　アナニエヤ 義哉　此紅
石ハ寝ゝ鶴明く清水ゝ郷　梨水

雲照てるや　[illegible]　石　呂茄

二坂

[illegible]坂の[illegible]油[illegible]といふ[illegible]

長競杉（タケクラベ）

二ことゝ[illegible]杉の[illegible]さへ[illegible]等しくすゞしとれ[illegible]溪間に
又相生れ杉[illegible]これ杉[illegible]れば又谷れ杉[illegible]とおら
[illegible]いふ[illegible]所以[illegible]の樹れ下りさい乃同[illegible]
女わらべれちいさ[illegible]石[illegible]積[illegible]乃至童子戯
聚砂（テヲ）爲（ス）佛塔可恩可感

[illegible]石[illegible]　先　江戸　銀葉

[illegible]　[illegible]　山風

地藏堂

別当へ着たる道者あの下ゆく經木等は建門

山王宮

此文中ごろ廢壞なりしなるよりさらなり年東叡峯の願王院主台宗擁護の神なれば再営ス度日よりあらく朱(アケ)れ玉垣ふたたび輝かし永く台家傳燈の守とおさしめん給ふ

伊弉諾(イザナギ)山

若一王寺と号せ伊弉諾伊弉冊れ二神は崇とそ御のまゐる下なりいふ所は石とくて大なる叢あり往来れとも此より西れ分れ当る泉生乃法を山巻投とはしら神と濃

香芬郁(ゴウ)より

梅なり月桃もが所れ　照なりしぞ　東水

むかしに伊ざ所さ石乃座そこは　羽黒　覧水

若王寺

此寺は世々一山貫主職を寧(ツカサド)つも法國散在の末流は検断を寺山は號をは伊弉諾山若王寺宝前院と号は當時東武輪王寺乃ゑれ法を配にして繁栄遥日月門前より蓮池あり中より辨天宮ありそれ外霊佛秘寶来由の著(イチジル)は舊故年は積くたやすく記しかたし此寺そのかたは山ありあるは天宥法印此所に移すなり此天宥師乃事は五十世れ別当にしてその智れ才用を

まつり一山の棟梁ニ此時にしてまつり芭蕉翁紗脚の事に
申候せし文に知るべく　芭蕉菴櫻青拜

羽黒山別当執行不分明天宥法印ハ行法いとゞ紀
きさんあつて止観圓學の法智才用人に施しく
あ所ハ山に穿ち石に割て巨靈の力女媧がたくと
をきして坊舎に伝ふ階に組れる青雲の滴に
らけて覚れ水とをくゆんぐ勢石に怒来れ二四山
乃奇物と称せる物多し一山峯にその名に慕ひ
それ徳にあらずして而てとかゝび羽山開基より
等しさはべしいかなる天災になせるまゝあらむ伊
豆の國八之王に沙風より卵をそそくはしく波の象

まつり物きまとりとまん告侍るとやあの宿に宮三
山明礼の席テ追悼一句をまるへきよし門徒等ニさり
に勅先ニ所にしりとなりて鐵言一句をはらね
て香に後らしを向侍る悼多き事になん侍る
それ其事や羽黒にしり如何を法乃月
年ハ元禄二年の所になん翁行脚の折ふ圖に呂丸
を得ひて別当代會覺阿周梨より謁(エツ)を南谷別院
より舎(ヤド)しく情愍に情ある所やかにあらずせらる
ち雖も雪に茂草にしを風の音　芭蕉
まむ程人にむしまゝ　蔓艸　呂丸
此時に一巻ハ其角の筆摘り板形を會ひん師に美

濃國谷汲山へ方便うつり給ふ日丸を亡人となりて其
名のこれより彼ら事ハ都の方としる一隅より詳
なり字來り省略して

此寺住職の法
良哉の縁り

僧正胤海

いかでしく今宵の月に旅寝思ひいで羽の奥の山寺

寺ごえノ林 櫻仍しきの口わしき 淵春

俺那見の衣まさに浮 緑の音 浮生

きそうれや坪中より岸乃花ざらり 釈白鉄

文覺游

古の游若王寺より小の谷あひより行きその吽高雄
の上人蜀山より登りてし此不ハしも數多成送り護地乃
異感冨天王の加被より行るるの春記りしみて侍るに六波羅をまて

游蛍や蟬乃あらざれの何と洛叉 此紅

日中も櫻より照りぬ花の淺られ 立宇

西行戻

西行法師登山の事古紀りしみてより蝋浮すゝ西行ら
除後の櫻をしありそのわしも此本より行ら事や
語るりいの称る旅の侍りくは本より立帰りたん盛
米取りゆかるまでく西行櫻といへる一本の言るるよ

かれも見し此萬の名所のこなりりるぞいらど 攫

山路弾滞まてちや萬まこんの子舞 嵐雪

東風けまりたまて角のうる津ゆり 氷花

南谷

三の坂へ上る右の方より三町ばかり行くと寺あり紫苑寺と号す則三山修行職の寺なり上古は三長吏五大達院主職学院職長上職ばかりいつる職ばかり紫苑なりけるよし今は此職寺のみ存せりその寺の下より紫苑寺谷地と云るあり渟水をいへりそれかゝ伊勢国五十鈴川の蛙ばかりあるよしかぞかりの小虫うける事の様なり侍れどもいかなる故にや古よりかく尸侍ありしめる延宝年中ともに冬の内蛙の鳴けるよし時の人奇なりとそこを後伊勢の又十鈴川にもとくは蛙をあまたく鳴けるよし彼国の人流れ

と称ん

反魂梅發薫南谷　南谷活春萬國新　實傳
楓葉秋來好花好　風光又愛好於春

次韻

南谷地靈人又傑　宛然常愛物光新　海秀
櫻桃開盡楓林錦　冨貴風流秋與春

冥加あらせ給へ古塔の柳乃もの　呂丸
水をうつは隠れたく居たしこの谷　桃隣
学や様ある干菜のうけ給し　東水
雪は寄るく底より梅ありタ名ふり　此紅
燕やまいむ泥りをうぬ茶の匂ひ　李山

こゝろ繁かや本尊ハ成とぼる南しに　梨水
こゝ朝月や氷ゆくけど鐸(レイ)の音　不及
章石堂へ釣らしれし　朴(ホウ)乃ゆる　呂茄
榛や　後ゆりおとらぬ小木に行　山風
法成康も貴をとくぶくや花志さこ　其翠
弁ゆゑが立がれ見えより　鶏頭花　庭(アツミ)水

三ノ坂

坂成上れば八幡宮あり九ゆる九日流鏑馬に神事あり
法印由縁これあるといへとも略せく宮前よりかに関成八
まん坂といふ
野ゆらしに繪ゆりて駒に乗てゆゑ　立志
袖むけと汗や姉見ぬく　雲境　此紅
されどこそ杉はしぐれて鳴に礼　久武
檀所院　善臺院　圓珠院　玄陽院　儀本院　福乗院
般若院　今改号三学院地蔵堂アリ　右三十余院の内なり事実略しく

花蔵院

羽黒宮中大先達の一寺なり是等の寺ハ皆云れ所
基已来幾星霜成積りん寺院のうち霊宝故実等詳
ありしがたし當住侶清海師なる此院の規模あらして
中興といへき大建立にあらずその外一山に勤労
それ勲功他より秀なるゆゑ知りて知るゆゑ誰か是
を称さん彩中近畿造建寺院(スル)乃ち當南東方出丈

餘岩土形如西字、是雜天の種字也、御ゆるし權現本社
のゆらび雜天堂の魚ゆり冷水涌出して此梵字の魚
より来る名奇異なりかしして穿井その水を取りて清
冷にしてく如耳露妙藥、是豈天女ゝ感應不甚深乎固
名福寿水又呼耳露泉此流の絶京島海成向にし
寂上門漾(ヨウ)くらしく浪也く船より心成の寸畏(ウシトラ)は湯成月の
乾(イスヰ)を龜の濟まるべあらはにかゝ所に村里えんしいと
まぬ事多なり

先帆行帆月見る人は其ぞこの船　無倫
浦ならば其をまけ船ともよる此　康　東六
山眉成桃ますべしもうゐん　門　久武

景さいかり貝成ぞ此ぞ此すぐ見ゆる船　水軒
酒涼しけるこの海成　水　ぞ　令　紫片

宝徳院　南陽院　能林院
右三十余流のうちにの船りなりしびしり

能除太子御(ヲマシ)坐石

往昔能除太子登嶺の折にうちにしの骨成息(イコ)ひ給ひ
時御腰を掛られ給ひまゝかく名ぞけ給ひしなん舊は能
林院の地内にあるなりあらたる御瑞にありて此所
に移し往還の貴賤拜する事にさいそ船まゝり感銘云
太子昇天の日にかしける御皆のこゝに此石上に止まり
きるゝりよるもかく名ぞけ給ひしもの

苔蒸むすまくしは石のもと青だく　凡　永軒
立よ所に風こそぞのしし苔の花　且松
千載の汗やうしまれ石の霜　立宇

十五童坂

終の坂あり弁天堂の鳥ゐ物まいはかく名ばけ結るまゝ
終行屋浦と云所にの事なりけり

下花表

辨天堂

是往古よりの堂にして確現本社の堂番は勤む弁天
乃權護の不思議經紀より讃歎せるがたとし此弁
己の奇特に稱しあるといへとも畧らく

能除堂

太子の御事の異説紛々なれとも其中の正統はいふ
舊記曰崇峻天皇第三王子一名參拂理依形質頗爲慕
荒相放北海濱然太子直歸佛門詣而師于聖德太子以雜
髮染衣焉法名弘海心性勇猛偏有凌雲志且離京域捿
遼濱往攀羽山修捨身行住阿久谷三秋衣以藤皮食以
樹果平日無他辭特信般若經力誦能除一切苦之文又
誦能所一切空之文故時俗呼曰能除仙云々おのつかり此時
蘓我馬子謀弑天皇事見帝王略記等故太子出奔乎又曰
人王三十代欽明帝御宇至崇峻帝王子參拂理依天童
之誥至羽州時片羽八尺靈烏蜚來而導登于羽峰拜生

身觀世音菩薩時讃曰善哉聖者修勇猛行一身善業
普利于他當感見弥陀大日所居土則化成靈烏蛍揚月山
及湯殿山且虚空誥曰我是羽黒神社也永欲使汝興吾山
即授三面宝火珠云々太子此宝火珠ハ以ニ自燒ニ時
不動明王自臂放瑞出ルカ被之則清淨常火是なり
今此世ニ利ニ之も湯殿行者ハ此常火ハ用ひざれハ登
嶺難叶行常火堂の下より奥より戴ニ之月山湯殿登
嶺此と見奇瑞彼下より詳ニ之故略ス爰太子山中より遥
建せる所此寺院若干なり所中より
羽黒山寂光寺　堂塔山瀧水寺　南滝山禅定寺
來光山千勝寺　下居山中禅寺　醫王山機乘寺

不動山嘉祥寺　添川山加我寺　金色山福王寺
荒澤山廣澤寺　此外数多ハ所ニ悩る所ニ也あるハ
略ニ之ニ之ニ見ニ之ニ一尺六寸乃彩像ハ刻ニ安置ニ
給ふ今より仏ニ之
太子在世靈驗廣大なる中より先太子山崖宴居の時
うち近里疫病ハ悩む能中介川縣主狭長して三年
腰脚痛より故より頻ニ太子ハ高徳得益ハ慕ひ之山
崖より請ニ之則太子到らんとする日彼縣主の屋宅より
火出ニ之悉燒ニ之ニ病者ニ也おびえ出ニ之ニ此ハ
病ぬかれかたり太子到ひまゐ刻その屋宅着ニ之
痛む所ニ之病者ニ頻より愈へ腰脚おのづから堅康

なり是則能除一切苦の經力般若の智ゆへ以て病
患速癒り燒亡を除となん因て以て貴賤是に崇
尊しその功いよ〳〵あるし
上件の事〻舊記乃趣意に拙き筆を略識し
太子の事は遍く世り知らず殊りたる子の事彼
是兄東野に依て當山五十世の別當天宥師の高
第覺樹院宥海の水無瀬中納言殿の御息なれど
此太子の御事禁中記錄不ゆへ尋ね給ふ所なり
と清文通ありて別水無瀬殿に自ら清尋ねあり
なれば小さし崇峻帝の皇子と御ふ清返書下りたる
なりかゝ御いらぶ清身の遠陰まさしかひ無ゆへ編す

出家抖擻のわさしと云ゆへ或議曰往昔奥羽俗近蝦夷
勇押羌奴抗王師事所戴史傳可見吾能除獨開山奇驅
猛獸而後蒼生得安遂使之頒西天法味長為朝廷之藩
屏且奥羽俗識大權現為地能佐信之三州共浴其化者多
焉奥羽諸侯東征都督皆先致幣帛於此山若怠則危云〻
此能除堂より於て一世別行の上人衣の色を雲御
金剛佛子阿闍梨弘俊尊法坊推古帝の勅にうけ始
て執行の位より任ず御より已來今の世乃上人号此堂
にしてく黄衣に戴くまの故實なりこれらの趣山城
法印永忠申れ秘書あるも
末年記や法ゆへ手と分れ菊の山　東水

花守や行乃そのふれかなまわらを　吾笳

より記せし上人号れ事も覺樹院殿より水を瀬殿へ
尋ねはらはされたるや此宥海法印れ事ハ美應元年
の比天宥師師弟の法契約あるゝ同三年年の夏羽
山へ法下つゝあるゝ峯中修行ましくたる度祝といへる
者より峯より猶らせ給ひたる狂詠もあるゝ甚しく棒
ゆゝく佛法僧といふ鳥る靈鳥鳴たるとなん此鳥れるハ
類ひ物に靈鳥とぞ高野乃通念集ゝも事佛へより
かゝ尚奇事筆墨の席より云ふしとぞ先ぬ云て給ひ
これ法家山門修学経過ゝ比山へ又くゞり御くたる
とに天宥師と卿法中遣ひしまる事やあたん寛永四

年ゆゝし二十六歳ましく一云萬里れ方となりせ給ひ
たるぞ哀まる物く見へ侍る遁世御しくたる物から法
坊舎れ一間より一首成給しまふ
物かれ花のよ物る霧よりもかゝく仇なる世まゆへ

神輿堂

三山權現乃法輿ゝれ堂ゝあり毎歳六月十五日れ法
祭祀の時是成出ま

大柴燈石壇

天下國家五穀豊登れ祠ましく執行職先達職是成
修行せる事あり柴灯大柴灯乃事喰越の下小粗
志御を峯中の行事也しに秘事なれば略ゝ執

行職家定の時於開山堂大饗あるを

御影堂

當山別當執行四十八世宥源四十九世宥俊二代の清新
并ひろ家と出羽守源義異乃清位牌ありこん和年
中ろ宥俊造建